

学校・工場 紙をあて色鉛筆で

町の表情こすり出す



家族連れなどが神社の石畳などを写し取った(7月、東京都荒川区)

学校や工場、商店の壁や床の凹凸に紙をあて、色鉛筆で紙に「町の表情」をこすり出す住民らの活動が広がっている。東京都荒川区では2年がかりでこすり出した写し取りを1万枚集める取り組みが始まり、新潟市では取り壊される体育館が題材に。傷や木目などを手で感じ、施設などの歴史に触れる試みで、関係者は「町により愛着を持ってもらえれば」と話している。

荒川、1万枚作戦 ■新潟市、取り壊し体育館で

歴史に触れ愛着深く

神社の石畳、地蔵の台座、橋の塗料のはげ跡……。7月中旬、荒川区南千住に住む親子連れなど約20人が猛暑に汗だくになりながら、B5判の紙に思い思いの場所の一部を浮かび上がらせた。縦横、斜めに細い線、太い線で何色も重ねてこすり出す「フロッターシユ」。

もともと、硬貨といった身近な物や木肌などの自然物を対象に凹凸を写し取る技法だ。「町の記憶PROJECT」と呼ぶ荒川の試みは小学生の授業にも取り入れられ、7月に5回開催。同区の主婦、川崎寿摩さん(35)は長男(10)らと2回参加した。「解体される工場の床に残っ

た数多くのボルト跡を見つけて、「かつてどんな機械が置かれていたのか」と想像した。子供も小さな発見を重ねてほしい」これまで集まったのは約800枚。今後も月2〜3回続け、2年で1万枚にする予定だ。企画した地元商店街の有志らによる「千住すみだ川」の海老江重光さん(39)は「手に伝わる振動や色ムラなどを楽しみながら、それぞれの歴史を感じてもらえれば」と話す。

新潟市江南区では8月中旬、老朽化で取り壊しが決まった旧木津小学校体育館を卒業生らのグループが写し取り始めた。築約80年の瓦屋根の木造建築。中心メンバーの公務員、石井清さん(52)は「1学年に1クラスの小さな学校だった。床や壁をこすり出している」と、友達と一緒に駆け回ったころがよみがえる。28日には一般からの参加も募って実施。29日にも続け、合わせて千枚を写し取るつもりだ。

2つの企画に協力するのは、現代美術家で東京工科大学デザイン学部准教授の酒百(さかお)宏一さん(42)。フロッターシユで建物などを写し取る中で「地域の暮らしや歴史を一緒に伝えていきたい」と考え、住民に参加を呼びかけるようになった。荒川と新潟の企画には主催グループからも深めて」と話している。

作品としてまとめ、各地で展示する。酒百さんは「フロッターシユは簡単で、選んだ場所や線、色で個性も出やすい。自分なりの一枚を体験し、地域への理解も深めて」と話している。